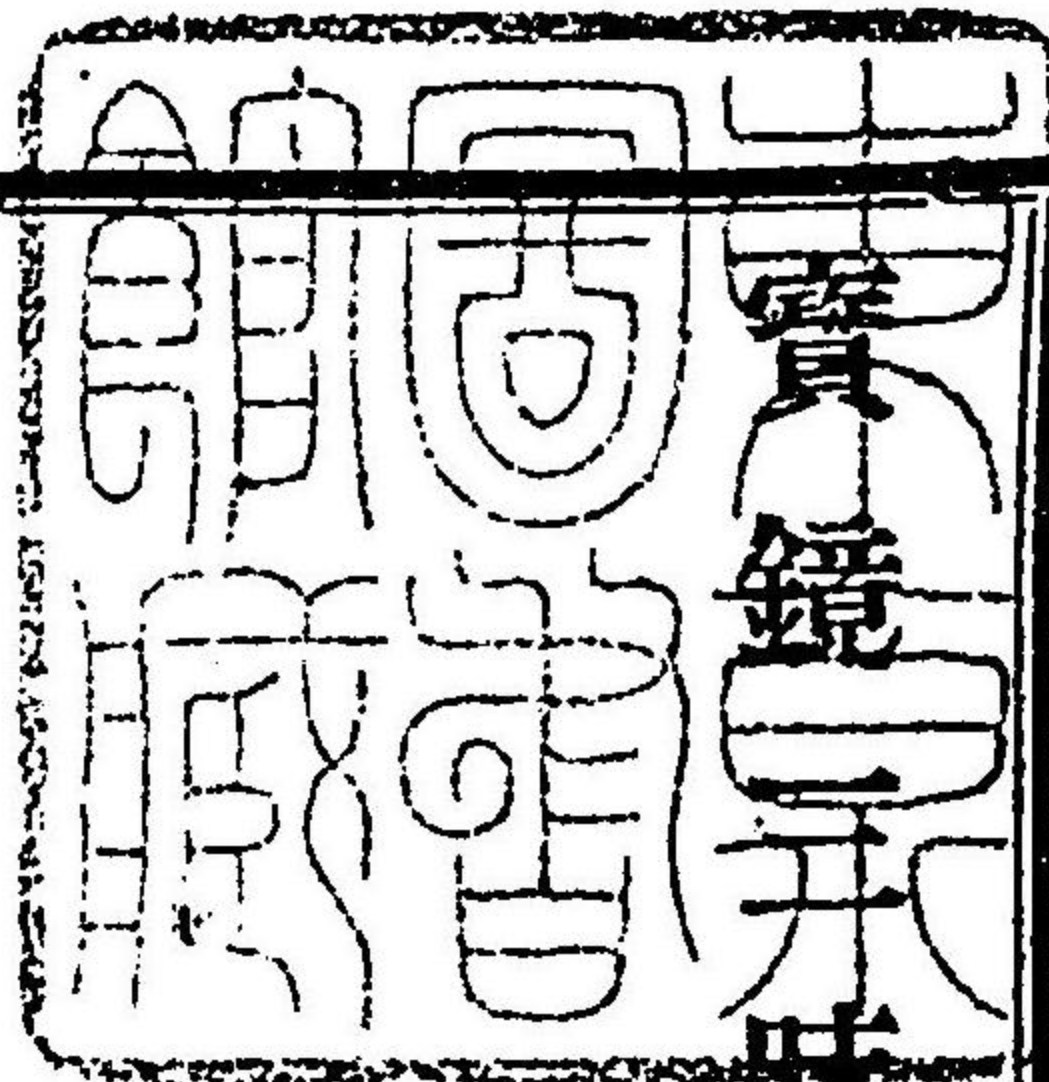


明治十九年三月二十六日内務省贈付



寶鏡三昧 薰菴談

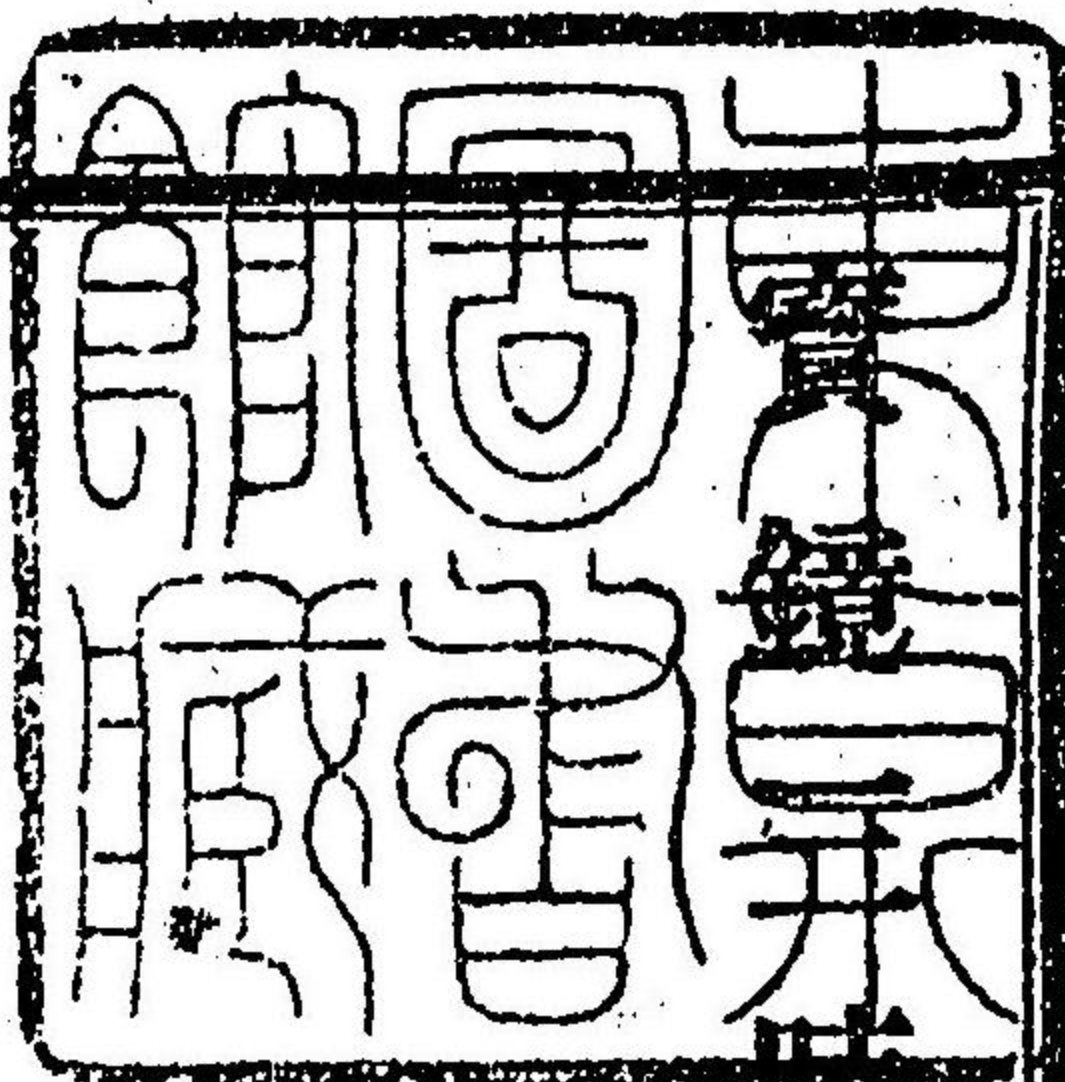
大乘月舟和尚 講錄  
天目恒川和尚  
西有穆山和尚 訓點  
林古芳 刪補校訂

寶鏡三昧

○恒川和尚の辨にこれ篇の述者未だ詳ならず其異説既に古徳之を盡せり弟靜に考ふるに寶に洞山大師の所述なり。始終の意味過水の偈に根據を暗に五位の真訣を含めり寶ハ稱美の言なり明鏡と言ふ如き明鏡に臨むときハ形の娟媿を移して味まさすこの書に臨むときは意



明治十九年三月二十六日内務省贈付



寶鏡三昧 薰菴談

大乘月舟和尚 講錄  
天目恒川和尚  
西有穆山和尚 訓點  
林古芳 刪補校訂

寶鏡三昧

○恒川和尚の辨にこれ篇の述者未詳なり其異説既に古徳之を盡せり弟靜に考ふるに寶に洞山大師の所述なり始終の意味過水の偈に根據して暗に五位の真訣を舍り寶ハ稱美の言なり明鏡と言ふ如き明鏡に臨むときハ形の娟媼を移して味まきすこの書に臨むときは意



此美醜を照し、明かり是故に況へて以て題目とあす  
三昧の名義は凡そ心相を應えて妙處を得るの謂よて之  
を三昧や云ふあり

○月舟和尚は辨よこれ書は室中の蜜授よして流布よ屬せ  
す宋朝以來おれを世間に公行す全く洞山大師の作や云  
ひ雲岩和尚の作よて洞山大師之の傳ふるありやも云へ  
り又は雲岩和尚の藥山禪師より傳ふると唱へて作者詳  
かならず書中多く洞山大師過水悟道の偈意多く當よ洞  
山大師の作述あるへし。況や文章乃妙に至ては洞山大師  
に非よすんは誰も是れよ及はんや知るへし室中潛に曹  
山和尚よ口授し玉ふ形影は法門は過水悟道は頌よ本け  
り凡う影を以て不生の生を諷し不思議は境界を譬ふ般

若れ六喻十喻も不思議の譬をまを一切有爲法の偈容易  
に看過すへかす三昧は義廣く經論よ出す中に就て大  
般若よ若干れ文字を列ね智論に其境界を辨折をまを微  
細の分別なればよやすく測り難し中にも三昧は一三昧  
よ一切れ三昧を統攝すや云へり知ぬ寶鏡三昧は王三昧  
の三昧あることやと

○編者曰く洞山大師過水は偈に曰く切忌從他覓。迢々與我  
疎。我今獨自往。處處得逢渠。渠今正是我。我今不是渠。應須恁  
麼會。方得契如々。と有り況や本章は寶鏡に臨むか如し形  
影相觀る汝是れ渠に非よ渠正に是れ汝や云へる至りて  
は一層洞山大師の作述ある。或保證するに足る。古今述者  
れ名を題首に擧げざるは密傳の秘本よあまはなり今書



名のおれを以て述者乃彼此を論するは活眼よ乏しけれ  
はなを深く参得し是是非を論するもやなれ實にされ  
洞山大師の眞作は相違あるましくと参しまいらるるも  
その般若は六と十喻は幼。焰。水月。虚空。響。軌城。夢。影。鏡像。化。  
かり本文の寶鏡は第九は鏡像かりと云ふの儀なり六喻  
は十喻に攝しはるるを略して誌さす○般若智論云云を般  
若は三昧を釋して如何んの一三昧と云ふや佛言く法  
界一相よして法界は繋縁をこれを一行三昧と名く○智  
論には一切の禪定心は攝するを皆三昧と名く秦には正  
心行處を云へるの類は略説しるるをれからん

如是之法。佛祖密附。汝今得之。宜能保護。○恒川和

上の辨は法を無法あり心も無相あり争ふ名貌する

こと或得んや唯に如是と言ふのみ如有如無如迷如悟一  
切如如にして全く染汚あることなし是れ諸佛の眞宗な  
り群生の本源なり佛佛祖是れ如く傳へ是の如く付し  
く間に風を通せず之を蜜付と云ふ汝今といは如是の法に  
通契する底を指しかり切に須く保護すへし作麼生を保  
護請ふ左右と看よ

○編者曰く如とは一切不異不變の義よし是は物々非を  
脱する諸法の相を云ふかり古註に如は真空なり是を  
妙有なりと今この如是の法を吾等日用れ行履も愚の如  
く魯れ如く即せず離せず保護すれば汝として之を得よ



る。このは一人もなし之れ。佛祖の蜜付こそ思ひつるなり。蜜は却て汝も邊にあると云句ある深く思ひ遣れ古芳なるは有るなく頂戴するあり。

銀盃盛雪。明月藏鷲。類而不齊。混則知處。○恒川和

尙の辨にまの四句は如是の法と保護とるは提綱なり之より下は此旨を弄して如是の法保護の宗旨を示し玉ふなり如是の心は万境に類して齊しむらす銀盃に雪を盛るは如し万物が混して類せし明月鷲を藏すは如し回互して不回ほ不回互にして回互全く隔碍なく染汚なし此の宗旨を薦得しは永く兩脚を伸へて安眠すへし處とは分知の義あり。

○月舟和上の辨に能く一切の法に一色し一切の事に一色

して銀盃と雪と異色なり。如く明月に鷲は隱れ同一色なり。如く類して纒も隔てなく混して纒も透間なきを大功一色の修行と名く般若蜜多一味なるは故に法も又一味なり能く一切の法に類して而も一切の法も齊しむらす能く一切の法を混して而も墮せざる處を知て同ふせざるは異類の修行。名く一切の法は即ち一切の法にあらんは是れ一切の法を名く都て一切の法を顯し若くは相を顯はれざるは偏位なり法と相を隨せざるは正位なり故に偏位は色界なり正位は空界なり。

意不在言。來機亦赴。○恒川和上の辨に凡そ佛祖の宗

旨を必ず言句文字にあらす來機あるときは言外に機を通ちて趣あるははし故に擊竹の旨は得て蛙鳴の宗と



會に況や文字言句に於てや只銀盃に雪と盛り明月に鷲  
を藏ひ其境にありて其境に隨せざるべきは來機自然に  
宗を得て如是法界に趣向せしと云ふよとみし  
○月舟和上乃辨に意を元より言語にありけり且く言語  
を假りて意を通ひるる故に一言半句を以て來機を辨し  
來機に趣くかり依て言前に聽取し句外に承當するあり  
○編者曰く佛祖は無舌人のことなきを殊更に言語を弄ひ  
るは好まざると法の檀度なせばこそ四來れ物機に應  
して拂拳捧喝の方便ありつるなり左れば學人は直に機  
先の眼を開れ動と差に隨せし直下に大火聚なる加是法  
を識得ひるこそ學道の所詮なき錯て漏器の罪人となる  
おとならむ

### 動成窠臼差落顧佇

○恒川和上の辨に上を承て如是

法の應機を辨するあり佛佛祖祖の應機接物を水月の相  
應ひるる如し思慮と動せし彼此を觸觸如如にして  
全く染汚をし然きは師家は來機を見しして動を起は觸  
處に窠臼を以て師學ともに差互えて顧念佇思の妄識に  
陷墜して如是法の宗旨に違却す嗚呼今時師學も自己  
を知らず他已を知らずして習師の習弟を導きて群習岐  
路に墜つ豈に漸愧せざらんや  
○月舟和上の辨に來機を辨し來機に趣くや雖も一毫の  
動を起は意識情慮の窠臼を以て微塵を差へば顧念佇  
望乃分別に落つるあり都て意乃萌し識乃萌し後動と云  
ふあり故に動着するをなかれと誠むるあり



○編者曰く窠白ハは鳥の樹にある巢を窠と云ひ鷄ハ羽虫  
ハハりたり兒に乳ハ與へたりとる凹所を白と云ふ○顧  
行とは行ふんとして止まり去らんハして住ル思慮の  
定まらざるの意かり共に染汚の謂かり宜く岩頭和上の  
ハハるは根塵ハ脱せハとされは生死に沈むの金言に參  
志ぬへし

背觸共非如大火聚 ○恒川和上の辨に如是の心は大

火聚乃如し動て來機に觸るときは面門ハ燒却す來機に  
退却とるとは火徳ハ遺失と觸せと背せと如何ハる不  
犯ハ通せんや木人夜半に靴と穿ち去る去石女天曉に帽  
と被て歸る

○月舟和上の辨は絶待の大法を一切の相ハ離して背觸に

涉らハ壁へは大火聚の四面に現然して淨ハ裸ハ赤洒々れ  
面目露堂堂ハとて盡天地に獨尊不二なり火ハ南に位し  
離の卦なり三昧も大火聚ハ謂かり

但形文彩ハ即屬染汚 ○恒川和上の辨に上は背觸の句

ハ承て不染汚の宗旨ハ弄とるハ但ハ徒かり猶ほ卒爾  
ハ云ふハ如し如是の法を卒爾ハと文言摸彩に形ハはせは  
即ち染汚に屬とるなり不識と云も揚眉ハかハ是れ染  
汚なを畢竟ハ是個の物に非ハ一切の限量と對待を超過  
するなを其の當躰即ち是ハり恁麼に承當するも是ハ染  
汚なり作麼生ハ消息ハ通せんや請ふ下文を見よ  
○月舟和上の辨は一切辨白なれ境界に纒ハ知見解會ハ文  
彩を形せは即ち染汚とハるハり説似一物即不中なり唯



嫌棟擇なり只たこの不染汚は諸佛の護念する所なり  
○編者曰く説似の句は南岳懷讓禪師が曹溪大師に参した  
るといふ什麼物恁麼來の接手と措くをくこやかく八年修  
行志後に答へある句語に於て曹溪大師は諸佛の護念  
なり汝も我も西天祖師も如是と證明をされたる公案  
の取意をさるる○唯嫌の句は鑑智大師の至道の全躰或直  
指さきたる語なり

夜半正明。天曉不露。○恒川和上の辨にこの二句は上  
の不染汚れ旨は辨したるなり夜半正明とい暗にして暗  
ならず天曉不露とい明にして明ならず背觸に涉らず文  
彩に屬せず彼が離れ此と離れ洒々落落なり是こ乃没量  
底諸佛の護念する所なり之に依て徧正回互の法則と立

る者なり子細に見よ

○月舟和上の辨に夜半正明則ち明暗或離れて明あるに非  
ず天曉不露則ち暗明を離れて暗あるに非ず夜半なり天  
非ず天曉なきに非ず絶待の一法は契當なきは暗は暗れ  
當躰則ち絶待あり明は明の當躰則ち絶待あり絶待の中  
に自ら明暗相對して前後の歩の如く先行到らば末後太  
た過く其迅速なる電光も追ひ難じ我の承陽大師は天下  
後世の規範として一言半句を文章に顯し説けり故に擇法  
眼次具せざる者は遠路なりと評して曹洞閃電は機要次  
知らば誠に愚の至極とる者なり

○編者曰くこ乃二句は回互圓轉の機軸よとて來機に應用  
するの根源なきを須く着眼して虚参せざるをよとく頼



みよまいららるるあり

爲物作則用拔諸苦雖非有爲不是無語。○恒川和

上の辨にふれ段は有爲に無爲と兼ぬ無語よ有語と兼ぬ  
回互圓轉して不染汚の宗旨を弄ひ甚く妙なるへと凡そ  
一切衆生れとえ法則となりて染汚は諸苦を抜く是れ權  
化門なり假し説むて全く定法なき有爲に非すとすれと  
無語は是とひるよわらす左轉右旋とも脱着して自由を  
り是れ應機接物の活作畧みり或時は聲義細と説れ鳥を  
素となす是と有語中の無語なり無語中の有語よじて全  
く染汚なし機と有無は是非と偏正に屈曲すとは如是の  
法に違背す争ひ物ふめに法則となり染汚の諸苦を抜く  
よとを得んや尙や次の如鏡と如相と如離と如莖と如杵

の五如喩を用ひて不染汚の消息と弄し以て如是法の應  
變を會通する左の如き

○月舟和上の辨に能くおれ宗に達すきは萬物の規則とな  
りて拔苦と樂むあり絶待の一法元より一切相を離れて  
有爲にあらざるを全く無爲に沈まは機に臨み口は開け  
言語なきにゆらす二乗聲聞の無爲の深坑に陥りて利他  
の悲願を失するの類に同じからざるあり

○編者曰く釋迦如來の四弘誓願を彌陀佛れ五百大願を洞  
山大師の三路五位を臨濟和上の四窟主を物に應するの  
方便にふて自の手元には有無の影像なし故に涅槃經に  
も如來は一切衆生れよめに諸法を演説はきと實に所説  
なきと之を有爲にあらずとす此語を左れと用ゆると



凡ハ舌大千次覆ふて言語三昧に入る故に無語にもあらざるあり音は四生六道を能化するもさめは諸相と言語と假に現はるなり恰も千江に一千の月が現するが如きものあり故に下に嬰兒ハ五相を以て化物の相を明るせり

如臨寶鏡形影相觀汝是非渠渠正是汝○恒川和

上の辨よあの段は前凡の有爲無語を轉えて汝渠とある心境一如に於て染汚なき乃旨と辨よ玉ふなき形ハ影の本躰あり影ハ形の分體あり彼此即一にして俱に其實體あることかし汝は鏡前の形相と指よ以て心體を比況するかを渠は鏡中の影と指よ以て境體に比況するなり心は境に隨て現し境ハ心に依て成す彼此俱に空華底の

現成よ於て實體あることかし汝は有躰にして無躰の渠に同しあるさるは似れやと其汝を推すときは汝亦實體の形影あることあり汝渠を虚假不實の物体に於て二かく又一な若し有無の二見に涉るべきは外道の邪見なり全く佛道の正見よはあらば若し此の宗旨は會せしめれば物のさるに則とあり染汚の諸苦を抜くよとを得んや染汚ハ二見に執滯するは妄想を指なり寶鏡ハ形影を弄する處に依るのよ必ず寶字よ滯て祖意を失はるよとあるれ月水中にあり形影を弄するに何を異あらん静るに如字を視るに當に鏡よ主意なきことを知るへ志悉るよ祖意よ參せよ形ハ眼耳鼻舌身ハ五根なり影ハ色聲舌味觸の五塵なり是故に五相五變五味五股乃五數



汝弄と根塵一如にして心境無二此比况汝作り不深汚汝  
宗旨を會通するなり尙や參同契の所謂火熱風動より尊  
卑其語汝用ゆるまて汝宗旨を熟味して弟ら所辨汝知る  
へい洞山大師過水偈も切も忌む他に從て覓むること汝  
迢迢として我と疎かり我今獨り自ら往く處々に渠も逢  
ふよとを得るを渠今正是れ我我今渠に遇ふを應に須く  
恁麼に會えて方に如如も契ふことを得へよ左邊は苦口  
に此の語脈を探てこれ章旨を會すへよ水鏡や寶鏡や胡  
る差異あらんや又汝渠れ二字ハ異字同訓なり切も須く  
好看すへよ

○月舟和上此辨も絶待の一法を人人具足し個個圓成すや  
雖も寶鏡に臨むことみくんを承當はへららひ受用する

こや能をもるかり寶鏡に臨むやを佛知見の開發する乃  
時節なき有情非情同時成道の時節かり此時まさしく本  
形汝知るか故も鏡中此影は本形此影よりて分別はを  
他もいや承當はるなり過水悟道の偈は洞山大師自證の  
法門かるが故も我是れ渠も非はを説きぬ今は曹山大師  
も對はるる故に汝是を渠に非はは云へり本形と指し  
て汝もい影象を呼て渠とせり寶鏡に臨て形影と照して  
看よ汝曹山の本形も彼の鏡中の影にあらす彼れ鏡中全  
く他物にあらす汝は曹山大師れ本形れ影かりし哀れむ  
るも曾て寶鏡に臨まさるときは影を認め頭に迷むる演  
若れ如く狂走はる汝免ます斯の如き輩は胡る釋種と稱  
すへきや凡そ形は正位に影は偏位に喩るなり一説も鏡



き正位よ影を偏位とひるは洵に誤かり  
○編者曰く演若は室羅婆城中に居て晨朝に鏡を以て面を  
照らし鏡中れ頭に眉毛見つゝを愛ふ一日已か面目  
見へざるを賦責して魘魅とあす状を亂し狂走ひるは意  
をうゑし委くを楞嚴經に四は出るなむ○こは有爲無語  
にあらざるの意と辨えて彼此に對待多きの寶鏡は示せ  
り恚麼の寶鏡は他物よりあらざるは自己の脚下を顧り見  
るへし何きも汝か何をか渠も決しく一合相はも得ざる  
なり

如世嬰兒五相完具。不去不來。不起不住。婆婆和和。  
有句無句。終不得物。語未正故。○恒川和上の辨に今又

嬰兒の五相。後以て有爲無語は句は會通す併せて物の  
めに則ちなる乃宗旨は辨し玉ぬなり初生の嬰兒は五相  
を具すと雖も各各未だ其便を得ず有相便ち無位なり  
無相にして全く潔汚なし是を如是の法相にして如來乃  
心行なり則ちなり苦を抜くの左右なき涅槃經に曰く嬰  
兒は能く大字を説く如來亦然り大字を説きぬ所謂婆婆  
和和は無爲なり之を嬰兒行と名くこ乃語を讀む弟は  
所辨は知るへし言ゆる有爲は弄するとも有爲に潔汚せ  
ず無爲を説くとも無爲は固執せし全く舌頭に筋骨なし  
語未だ正まからざる故に覺範以來の所辨を故かくして  
五位と弄するは此三昧を用ゆる所以と辨せきりしは  
何れ謂うや



○月舟和上乃辨に嬰兒行は委く涅槃經に出る嬰兒行を即ち如來行かり嬰兒の五相を具するを以て一法に五位を備ふるを喩ふ五相ハ去來起住語あり

○編者曰く涅槃經ハ第二十一卷の嬰兒行品を指し本經乃不能語。以洞山大師ハ婆。婆。和。有。句。無。句。に變換されたるハ一層ハ深意を含めを往て指月老人乃解を見るへまおれ五相ハ佛祖れみからを寶鏡全眞の作用おれは人おしく具せざるはま左きと嬰兒乃如くならざる故に二六時中狂走をるは免れざるあり

### 重離六爻。偏正回互。疊而成三。變盡爲五。○恒川和

上の辨に今世流布れ書には如字。以用むす重字と采るは不可あり六爻れ語ある則は重字は衍となし笠上の笠お

り眼と開れく之は看よ中古已來如字と用ひす故に突出故お五位と説れ此篇を用る所以は辨せざるは怪むるゝ親く如字れ意旨は熟味く比況の語たるは知るゑ然らざるときは甚し明難しおれ唯五變一離は弄きて五相一身乃旨は會通するのみ更に餘意を假に魯典は擧しく佛説に和融するのみ疊變の説古徳これ盡せり煩く之は論せず必は枝葉を弄し本旨を失するおやなるれ

○月舟和上の辨は永覺古徹の解は宜しからむと故に五位顯訣に因て徳翁良高和上は五位の畧註を作るなり今考ふるに疊て三となるは茲に多議あり曰く六爻は疊て三となすの儀あり又下り疊て巽となる上り疊て兌となる



ハ離乃六爻なり(三)は巽なり(二)は兌なり(一)此三卦をみる  
之れ三とあるの儀なを巽や兌を上下とるときは澤風大  
過(三)風澤中(四)乃二卦となる之れ三疊五變あり而  
て離の本卦に歸る後ち卦爻の之く所なく是を變盡て  
五とあると云ふなり茲み用ゆるは離乃一卦れ八卦は  
本三爻あるを伏儀氏重て六爻となれ故に重離となす離  
を方にあり南の在所を火裏にて虚なり又物に麗れ明  
るなり炭薪の物類を合するに依て明るかり故に如離六  
爻は沙門金剛の眼睛かり一雙の眉毛あり徧正回互都て  
機を臨み變に應ひ決て按排を借らひ自ら回互と途  
と家舎を來往すれや終に中虚回互の離体に負るは五位  
自然に具する重離の言を借て比にて氣息流通を象乃み

豈に易道に理論に渡るもれならんや須を宗旨を失す  
ことなるを

○編者曰く恒川和上れ如字を前代未發れ説なり離の卦は  
(三)の三爻なり之を重ぬる故に六爻なる左れば重字  
を死せり況や前を寶鏡に臨むか如く又は世に嬰兒れ如  
くとあり後に莖草の味れ如く金剛の杵の如くとありて  
前後の文章を相應して見きは如字は欠くへからざる處  
なり故に古考は如字おそは至極穩當の説と覺悟せり(三)  
離れ卦を兼中到に(三)兌の卦を偏中正に(三)して澤風  
大過(三)正中來に(三)巽の卦を正中徧に(三)風澤中浮を徧  
中至に配當して解釋はせやも夫は易理を粘着して却て  
宗意の淡泊なるやに似たり



如莖草味。如金剛杵。

○恒川和上此辨は莖草の一根は五味を分ち金剛杵は一体にして五股あり是又形影一体なるのみ五相一身に悉く五變一離なり同等不二に悉く五如即ち一なり全く潔汚おれの比況なるかと明白あり如上五如の喩説を切に須く好看すへし祖師巧み五如は會し五根五塵を融し玉へり一如一相一相は無相あるの宗旨を説きより然るも中古重字に作るは犯罪彌天なり○月舟和尚此辨に莖草は五味子なり一草に五味は具へたり金剛とて五股なりこの二喩も一位に五位を具ふるかと明らかり瑜珈には獨股あり之を獨一法身は表は五股は五智は表はこれら法喩の二に符合せしむ

正中妙挾。敲唱雙舉。通宗通途。挾帶挾路。

○恒川和

上乃辨に上に鏡兒離莖杵の五物を擧て如字を弄し不染汚れ宗旨を辨は所謂如は其物跡に偏倚せざるの義あり今よの段ハ偏あらは倚ならは過不及なきの正當は指して正中と云ふよの正中ハ方法は包含して偏頗に墮せは故に妙挾と云ふあり唯よの正中は佛乃護念はる所なり敲唱乃敲は行棒打拂なり豎説横談は唱あり然るも敲唱各別に行はるにわす故に雙擧は云へり雙擧は偏倚せざるの謂かり之は正中は云なを便ち妙説中に則と取らざるハ有語中の無語に悉く全く挾ふの義あり行棒は言外に機を通はる故は無語中の有語なを全く潔汚はるよあらは然れば言説と棒拂を何る異をあらんや之を敲唱雙擧と云ふ次乃二句と上乃二句を會通するあり通



宗。通。途。を。宗。乘。化。途。各。別。に。行。む。る。よ。ら。む。宗。に。通。す。る。と  
き。ハ。路。を。挾。帶。す。る。なり。洞。山。大。師。敲。唱。俱。行。の。偈。を。以。て。知  
る。へ。い。偈。曰。く。金。針。雙。鎖。備。挾。路。隱。全。該。を。雙。鎖。備。る。と。は。譬  
は。一。針。と。黒。白。二。線。を。挾。鎖。す。る。の。義。なり。挾。路。を。ハ。線。脚。乃  
通。す。る。處。あり。黒。白。線。形。は。挾。路。に。隱。顯。し。て。分。曉。せ。さ。ま。と  
二。線。該。通。し。て。差。互。あ。る。よ。と。な。し。之。を。隱。よ。し。て。隱。なら。す  
回。互。に。な。り。不。回。互。なり。不。回。互。に。し。て。回。互。なり。宗。說。兼。備  
し。て。偏。頗。に。墮。せ。す。洵。に。顯。然。た。る。もの。なり。

○月舟和上は辨に絶待に中に法爾と云て偏正二法を挾帶  
し左輔右弼とありて挾帶敲唱雙擧るなり一にあらは  
異にあらは伊字三點れ如くおればこそ妙挾と云ぬ又顯  
源は本宗に通一枝派の諸途に達一偏正の二路は兼帶一

唯一に中道と挾むあり芥子に小なるも須彌の大なるも  
此の二と帶せしめ云ふやなし能く挾ふて中的は犯さ  
るを奉重と云ふを文殊迦葉に如來に左右侍するに同  
○編者曰く金針は句を洞山大師綱要頌乃三首に初に  
敲唱俱行は偈なり恒川和上を上乃二句れ多を擧ぐ其下  
の二句は曰く寶印當空妙重々金縫開とありぬ○妙挾は  
道理を丁に鐘と妙挾とて同一時なるとき音韻を發は  
か如き夾して一方に偏せざるなり之を以て鼓山和上は  
正位中に本を一物とし實は一切に事相に妙挾を故に正  
偏双擧して偏頗を落はと云へり宜なるを

錯然則吉不可犯忤

○恒川和上は辨にこれ段は上の  
挾帶挾路宗說交錯すまじ偏頗を墮せざるを辨はるを



偏正回互挾帶挾路錯然として一物に犯忤せざるや吉なり然らざるときハ宗旨を失はるるなり犯忤ハ背觸れ義なり背觸に渡らざるときハ錯然として吉なり上の一句は離卦なり初九爻の辭あり自然に文意を借るれも編者曰く交錯すればまろ兩角立せず君は上に臣は下にありて犯忤せざるなり洵は石頭大師の明暗函蓋の妙旨も理事箭鋒の秘訣も洞山大師の兼帶回互もこの錯然たるよあらざるれば其妙旨を得ず錯然たるときも吉乃句と配當をばハ正偏互墮せざるる故に離卦あり左れハ何をにても犯忤すきは文彩に顯れ染汚に屬するなり豈に夢みある明暗回互正偏兼帶の奥旨を得るものあらんや

**天真而妙不屬迷悟。因縁時節寂然昭著。** ○恒川和

上れ辨に上の間枝葉を脱却しく當躰即是乃旨を辨するあり天眞乃妙道ハ迷悟に屬せり利鈍ハ差位は因により縁より時得て節に應するなり寂然とは不動の義なり昭著とは顯現れ義なり全く思量に涉らす如乎と一是かり此れ唯天道の常理かり輪語に曰く天何を言ふや四時行を百物生るや是をかり

○月舟和上の辨に單に君の心を心と毫髮も私心交へされは天真自然ハ妙徹なるなり君も万機と大臣も任せ玉むて端挾無爲なり全を迷悟れ音沙汰なと因縁や功極つてより無功み到るまゝ勤めて只管に時節因縁を觀るなるを佛性ハ大義も透間なり十方虚空消殞の時節と閑看をへあらず一彈指前かり閃電光や云を尙や是れ



鈍かり未だ船舷を跨らざるは好與三十棒かり寂然とは不動かを知るべし直下昭著なることを

○編者曰之天眞ハ永嘉大師の本源自性天眞佛ふきは誠の不可思議の物跡なり故に妙なり妙かれハこそ凡聖迷悟の數量に落せむ左れと柳は綠花は紅と万法如然に現成するハ時節れ因縁に依らざるはかき其昭著を始終寂然にして初中後毫髪も機輪茂動せず之れ天眞の直様なるもの

### 細入無間大絶方所毫髪之差不應律呂○恒川和

上れ辨に上乃章も所謂る天真妙道れ其細ちるや塵刹に閉塞して間隙かき其大なるや法界に周遍し際限かし觸々現成して頭々圓滿はる間も髪茂入を以然きとも毫釐

差あきハ天地懸に隔る譬は律呂れ制も毫髪を錯まきは十二律俱も差て音律に應せはこの處難々唯實參實悟然要する而已

○月舟和上れ辨も上れ二句は寂然昭著れ時節なり下れ二句も我が宗は功勳を貫ふといへとも功極るとさき芥子程乃功勳殘きは無功の旨も契むかたし譬は樂器の絲毫の違むより律呂も叶はざるか如き無功とハ目と眉の如き曹山和上に僧あり目と眉を相知るやや問ひされは曹山和尚を相知らすや云へり此問答の始終を考へて知るへし華嚴經に船陸の況むあり是より上は寶鏡三昧此本意を示し下は中下の機も隨て法の次第を明せり

○編者曰く昔も黃帝伶倫も命も律呂茂造る六律れ陽音と



六。呂の陰音かり合はれ十二律ありこきを十二ヶ月の節氣と配は左れば律呂ハ万物を生出すは根本なり毫と差るは四時調和せず三昧と恰ら然かあり一念差へも八万四千あり四聖六凡あり叶へて直下三昧の露現なり天眞の妙道なりこき能く本意のあり所は參るべし

今有頓漸縁立宗趣宗趣分矣。即是規矩。○恒川和上の辨に今字は用得て妙なり天眞の妙道は無間に入り方所は絶はれは迷悟に属せし修證は涉ふは寂然やして昭著なり何ぞ頓漸は宗趣に屬せんや然れども今時ハ衆徒は遲疾の氣分あるによりて自屈しく各自意根下し就て頓漸の宗趣を安排するなり外相は宗趣を自然に頓漸を以て定式規矩とあす終に其規矩裡に陷て絶大は妙道

を知らず嗚呼何の所以そや

○月舟和上の辨に心佛衆生この三は差別なきと雖も根機は不同なるか故に頓漸は宗趣は分ち規矩を立するあぞ

○編者曰く如是法に頓漸の閑名目なしや雖も證悟は己見より宗趣分れ規矩は立はるもはなれハ之れを天眞乃律呂に應せざるものあり宜しく石頭大師ハ人根に利鈍あり道に南北は祖の金句に參はへ

### 宗通趣極眞常流注

○恒川和上乃辨は縦令は頓漸規矩と脱却し來り宗通趣極をも尚ほこれ理路は屈見なり之を眞常流注と云ぬかり争ふ不染汚は宗旨に合ふあとを得んや

○月舟和上の辨に漸修の拙みき設む宗として貴ふ所は通



し趣と向ふ處を極めて至理に契ぬも眞悟よあはす根本  
を切らざるゝ故に眞常流注と云ふあり

### 外寂内搖繫駒伏鼠

○恒川和上の辨によら段え渠る  
馳走希求の念慮を以て比況す通極の知見は未だ脱せし  
眞常還て流注をみすれみ必ず閑に枝葉を弄ひるゝとな  
かれ

○月舟和上乃辨に二乘聲聞を有餘涅槃証せしとて般  
若會上には尙是れ破器とて智水貯ゆるに足らずと  
揀はせしり如何やなきは外寂内搖ハ繫駒伏鼠なればか  
り

○編者曰く宗趣は通極すきはとて己見猶存すれば一層は  
病あり故に一步に進めて慈門と打開し法の檀度となり

初て己到住着の病を治する人と申すへし

### 先聖悲之爲法檀度隨其顛倒以緇爲素顛到想滅

#### 冥心自許

○恒川和上は辨に先聖より想滅まゝ乃五句ハ  
冥心の一句を弄するゝために設くる所は序語あり若し

如上五句の下み就て直に己見滯着と説くと此は祖意を  
失はるゝり静み語脈を診みて之と知らしむ佛祖は一切  
衆生は悲愍して苦を樂とし不生の生とし不滅を滅と  
輪回の顛倒休期あることかく法乃檀度となり假に權化  
門に入ら其顛倒に隨て驚と鳥とみし鳥を驚となす方便  
功成し機宜漸く調む顛倒想滅は冥心自許と尙ほ  
己見に滯る之を己到住着の病とみす此病至はて重し是



故に觀樹古徹ツ攀ツ冥心自許の滯事を説を請ふ次章を  
看よ

○月舟和上レ辨ニ從上の諸祖之を哀愍一大法の施主とな  
りて甘露の白法と布施す彼れる顛倒ニ隨テ和泥合水漸  
く機レ調熟ニて緇色を轉ニ本の素緇となせり參見知識  
の功と以て他に因り証悟せニ自ら肯ふなり

**要合古轍請觀前古佛道垂成十劫觀樹** ○恒川和

上の辨ニあレ段は冥心自許の句より來れり冥心を自諾  
の病至つて重し古佛尙有リ法華經に曰く大通智勝佛十  
劫ノ間道場ニ坐シて佛法現前せレ十劫を過テ佛法現前  
の甚麼としてス斯の如くなるや未レ冥心の大果を忘せ  
ざる所以あり十劫ニ十成の所に至テ滯着スるレ謂なり

冥心は卻テ法の樂病とある所以を曹山大師の曰く本  
來衣を掛けシして法身を認得シ法執忘せニ己見猶存ニ  
法身邊に墮在ス必ニ窠白ニ翻轉シて始めて妙用全く彰  
るニあレ得ヘと云へり言は冥心自許ニ自受用三昧  
に誇る則は菩提乃証レべきニ衆生の度すへきなし是  
れ法身住着の病かりこの病津ニ沈ス未レ蔭涼の樹とな  
ること能はレ之ト佛法現成せニ云へり觀法漸く成り  
て法執の汗衫ニ脱却シて驢胎に入り馬腹に入りク大自  
在ニ得ル此時佛法始ク現前シ一切衆生のニめニ蔭涼レ  
樹とある是れ諸佛の大悲願力なり

○月舟和尚乃辨に古來の途轍ニ由ラんには前古の勝躡ニ茂  
觀察ニへシ祖門下乃ニあレならニ諸佛レ法ニ是乃如シ觀樹



の功成をきは佛法現前せむ云ふおとなし

○編者曰く大通は法華經化城喻品にあり○今乃本文は古佛を證えて極功の轉を難きを示す洵も後學を策進するの大慈あり端坐六年面壁九歳を徒看に付はるかかき若し十成も滞りおは恰も貴き金屑を眼に入きは翳とあるをらし○指月老人は滯果の病を智勝佛の微功の轉し難きを明し治療を釋尊に証えく容易に過患を除去するは出藍の卓見なりと古芳敬奉して止まら幸に後進の資哲眸を轉して看過あるを

### 如虎之缺如馬之鼻

○月舟和上の辨に虎人を喰へは其耳缺るあり自ら知らさきと人と喰むし功は以く法爾と云て其耳缺るあり馬足に鼻と名る白毛あり自ら知る

さきやあの鼻を以て暗にを惑はる路と知るなを是を天然の道理に志て作意はるはあらす此喩を以て寂然昭著の旨を明せり誠に廣大なる佛法現前すること纒る喩を假て意を盡し文章の妙なるを

○編者曰く本文より以下は恒川和上單に面山和上の吹唱も譲り弁會を爲さざりしる吹唱は現に上梓と世も行はるれを拔萃して茲も誌すも勞して功なく左あると死したる牛頭に草を按する同一なれば今は止免る古芳聊さる之を補欠の任に充んとる思ふあり請ふ照了○虎は格物論に状ち猶れ如く大さ牛に似たり人を食ぬ毎も耳必し一缺を今試に人食するの數を驗するに差ふおとなし○鼻は本草綱目に夜眼あり註に足膝の上にはり馬



おまを以て能く夜行く故に夜眼と名く左らえ虎の缺は  
犯忤なり馬の鼻は自肩なり何れも病に志て功位に轉し  
難きと況ふるなり之を上の十劫觀樹を以て後學を策  
進せられたるものや參究す海に石頭大師の所謂の執事や  
契理を誠えられたるに相應するものと覺悟せり月丹和  
上の解を寂然昭著の旨に喩へあまや兎角に短文なきを  
全意を參るるよ由み幸に後昆其意を得るに怠ること  
なまき

以有下劣寶几珍御。以有驚異。驚奴白牯。○月舟和

上の辨は佛法現前すきは必ず衆生のたえに開演す衆生  
本より長者れ一子あまきと五十年の伶併辛苦して下劣の  
根生ある故に長者乃門に至りても寶几珍御の王子なり

とて親ま近く大志なし左れは長者より追捉まきは悶絶  
して地に躡る此機を調へんやて弊垢衣と着る除糞の器  
以持して同事行なま若しくは驢胎に入り馬腹に入り  
て驚奴やなり白牯となりて漸々に近つた終には如來の  
寶位を嗣るまむ是の如く中下根の調へあたら化する  
は佛祖の悲願なり菩薩の根性なり佛行を學ぶ者はこれ  
根性と具へされま二乘に死地に陥り佛海中の死屍に一  
如す決まて一切智々の彼岸に到るこや能えさるなり  
○編者曰く寶几をしまけき等の寶蓋瓔珞の珍器と云ひ  
珍御は綾羅錦繡の御衣云ぬるり之れハ物の爲に則と  
かり下劣の衆生を憐み假りに寶几珍御を弄まて來機に  
赴くの化用以示すなり左れと未だ尊貴をたて容易に近



よらず却て驚異して逃げ隠る、故に亦下りて狸奴白牯  
乃卑賤となり尿尿の掃除より漸々に親近となり終に長者  
の嫡子あることと知らしめ國土國寶と讓與して無二獨  
尊の境界に至るといふ洵に滯累の病が轉したる同事行の  
方便あり之れを智慧の二門嚴然とし、佛法現成の所詮  
と申すべし。○鯨奴は色黒き奴郎にして下賤の至極な  
るものなり。白牯は男の白牛なり共に異類中行あり宜  
く鴻山和尚の水牯牛洞山大師の奴兒卑子の公案を照參  
すべし。

弄以巧力射中百步箭鋒相值巧力何預。○月舟和  
上の辨は弄は巧力達人あり巧力を以て射く百歩に中つ  
べしへても箭鋒相拄ふる妙處に至ては全く巧力乃及ぶ

所よりあらは百發百中志て自ら中る所以を知らざる妙所  
を喻ぬるなぞ

○編者曰く器は昔時射官の名なり今ハ射的の妙と究めた  
る養由基の如き人を指すこれ人おれば柳葉を去る百歩  
よりして射きは百發百中一も差ふことなし然るハ天眞の  
妙用よ於るを修證の能く預る所にあらざるはこゝ初  
め鹿野苑より終り拔提河に至るまで三百四十余會毫も  
嘗機よ差ふことなし故に利根れ者は佛果を証し鈍根よ  
は當來よ佛果を感得せざるなり洞山大師これ妙用を  
明かすに射術を以てせり然るを佛に及ばらざる人と  
して此妙用を具せざるハ佛海中の死屍なりと參する  
木人方歌石女起舞非情識到寧容思慮。○月舟和



上乃辨ふ無功に至ては巧力に預らさず論談笑語都て木  
人代歌あり行住坐臥石女の舞なり

○編者曰く宗語に木人とる石女とる鐵牛とる木馬とる金  
計とる玉線とる云へるは都て不思議乃物體を顯揚する  
の辭あり今れ如きも如來を婆々和々に忘て言相なき無  
舌人の解語なれば恰も木人の歌の如く今時に墮せざる  
なり若くハ起住去來みな不能みして嬰兒おれば没蹤跡  
斷消息なり寧そ情量意識の到るものならんや洵に物機  
に應動するれ妙用を學人ふそ乃思慮淡容るへきはあふ  
す

臣奉於君子順於父不順不孝不奉不輔○月舟和

上の辨に木人石女代歌舞代以て諸方にても了當と稱す洞

上には入門代許せや今は其歌舞をも抑して臣は君に奉  
從し子ハ父に孝順を順せされえ孝にあらざるを奉せされえ  
輔にあらずと綿蜜の家風を唱舉せられたるなり

○編者曰く孝悌忠信を彝倫の定理なきは取も直さす臣子  
の君父を奉順するを吾人本具の妙用なり其間一合乃相  
代を見と水乳相合する深蜜に至ては毫髮も思慮の音沙  
汰はかい君は正位なり臣は偏位をて父ハ青山なり子ハ  
白雲なり父子一枚おれハこゝ白雲常に青山に倚れとも  
總に知らす君臣道合すれハこゝ回互兼帶乃機軸なり寧  
んそ情識乃到るとはならんや實に吾人王三昧乃妙行代  
説似せられたるをれあらん

潜行蜜用如愚如魯只能相續名主中主○月舟和



上の辨に潜行。蜜用ハ愚乃如く魯の如く更に傍人乃見破に落ちず即ち但し能く相續し行くときを君臣道合して内外なく主中の主となり兼帯の君主と稱するなり寶鏡三昧ハ一大事因縁次開示して學人必悟入せしむる乃法門なきハ則ち如來の本懷ある法華と同一に志て佛法中の大眼目也參すへし

○編者曰く吾人の日用を愚魯の如く淳厚誠篤の妙行にてありぬればこそ事に觸れず志て知り縁に對せ志て照す之を如是れ法を保護する乃真様なり蜜附の端的あり呼く大尊貴生と云む主中れ主と云ふなを誰も恚摩人ヲ試むよ面門を摸索して見よ悉く眼横鼻直乃那人よ志て佛祖の嫡子ならざるはるし嗚呼大なる哉洞山大師乃直指

や言んぬをきえ却て親しむらす敬讚禮拜恩海此一滴よ酬んと欲す南謨佛

寶鏡三昧薰菴談終



寶鏡三昧薰蕕談附錄

林古芳錄

其三

寶鏡三昧

如是之法佛祖寶附

○第一大意。本書ハ洞山大師過水悟道ハ偈ハ所謂ハ渠今正  
にあま我。我今こを渠にあらすとの寶意より根境圓融ハ  
法門次脱き回互兼帯の機軸次明して正く吾人ハ滯果住  
功ハ病を治し玉ふなり實ハ其妙唱を能く如是法を宣  
揚して三昧ハ的意次打開したるものなりと參得しまむ  
くするなり(全篇の大意)



○第二解義。如は一切不變の義あり。是は物々非を脱するに  
謂なきや。も法と無法、心と無相なり。争も各執ひるま  
とを得んや。故に如是法や云ふ。其如是法を祖佛單傳し來  
る今を洞山大師より曹山和尚に、附するの意なり。廣くは  
一切衆生汝やして如是法を得るもの。一箇もなき蜜  
とて。教家に談する秘密の謂は。あらはれ却て汝ら邊にあ  
るに。蜜にして祖佛從來不藏の蜜あり。

○第三宗乘。實相無相微妙れ法門は一切如々にして全く染  
汚あるよと。かゝる是を諸佛れ眞乘を群生の本源なり。佛  
々祖々是の如く傳へ是の如く附して。聞斷あること。かゝる  
即今誰れを契通する底る。面門を摸索して如何と見ふ擬  
議せハ六十棒

其四

寶鏡三昧

銀盃盛雪。明月藏鷲。

○第一大意。乃一章を如是の妙法。以保護するの提綱に  
して。回互不回互。此機軸あり。全く潔汚なき。此妙用を。此旨よ  
り打得するあり。(一章の大意)

○第二解義。銀盃にまき雪。よまれ。明月にまき鷲にまれ。皆同  
一の白色に。く類すれと。を全を齊する。らす。即二あり。又  
即一なり。實を離せ。即せ。祖佛單傳れ。如是法。以保護さ  
るの眞様なり。

○第三宗乘。能く一切れ法に。一色し。一切の事に。一如し。銀盃  
と雪と異色を。れか。如し。明月と鷲と。同相にして。纒も隔々



なく混ぶる毫を間なれ之と大功一色の修行と云む一切の法に齊しからす能く一切の法に混ぶて而も墮せざる處は知て同ふせざるを異類の修行と名ふなり衲僧門下は斯の如く自由れ妙行ありて初て天は先て心乃祖やるる大丈夫と謂つべきなり

右ハ總じて本章乃下に辨したる文意を摘取分録したるものかり何人たるも意を用ゆるおや精ならハ斯乃如く大意解義宗乘ハ三科に排記することを得る也

### 参考

可睡穆山老師一日予に示して曰く中古師三同契文又は寶鏡三昧歌と唱ふ而して參同契に文を加ふるおや未だ証據

を見たと雖とも寶鏡三昧に歌字あるは和して加之乎寶鏡三昧に古來歌と脱するは論は面山和尚は吹唱に詳あり考ぬるに石頭洞山ハ兩祖を乃擧げたるも學人依して恒に讀誦せしめ自ら回互兼帶根境圓融ハ法門の暗裏に薰覺せしむるは婆心は成りたるものにして決して室内に蜜書にはあらず故に今に至るまで朝課は念經にまれ之を誦する所以にして恰も永嘉大師の證道歌三祖大師の信心銘に於するものなりと今や記を閣くに垂んとして拍々其間に哩囉と唱へ慕古ノ参考に供スル爾云



跋

參同契寶鏡三昧者佛門之寶藏室中之秘訣也曩時舟川二老施之鍵鑰然而不解受用者殆半矣芳公更與之觸即不開者自開不解者自解焉初學階之之則猶以芥子破鐵塔然則藏中之珍玩非他物室中之秘訣豈異尋常之談乎



古人ノ塵糞堆ヲナシ冊トナツテ世ニ行ル則チ參同契寶  
鏡三昧是ナリ今ヤ芳頭陀垂涎ノ余リ更ニ塵糞ヲ増層シ  
テ億萬人ヲ理却セント欲ス這裡誰レカ回避ノ人ソ諸佛  
ノ出世祖師ノ西來三十塵糞上ノ往來ナラサルハナシ咄  
塵糞カ黄金乎黄金カ塵糞乎忘想スルコトナカレ忘想セ  
ハ一棒ニ打殺シテ狗子ニ與ヘテ喫セシメン而已

明治十九年一月

林道隆記

明治十九年一月三十日出版御届  
明治十九年二月 日出版

定價金四拾二錢

静岡縣平民

刪補校訂并出版人

林古芳



遠江山名郡大之郷村  
四拾九番地

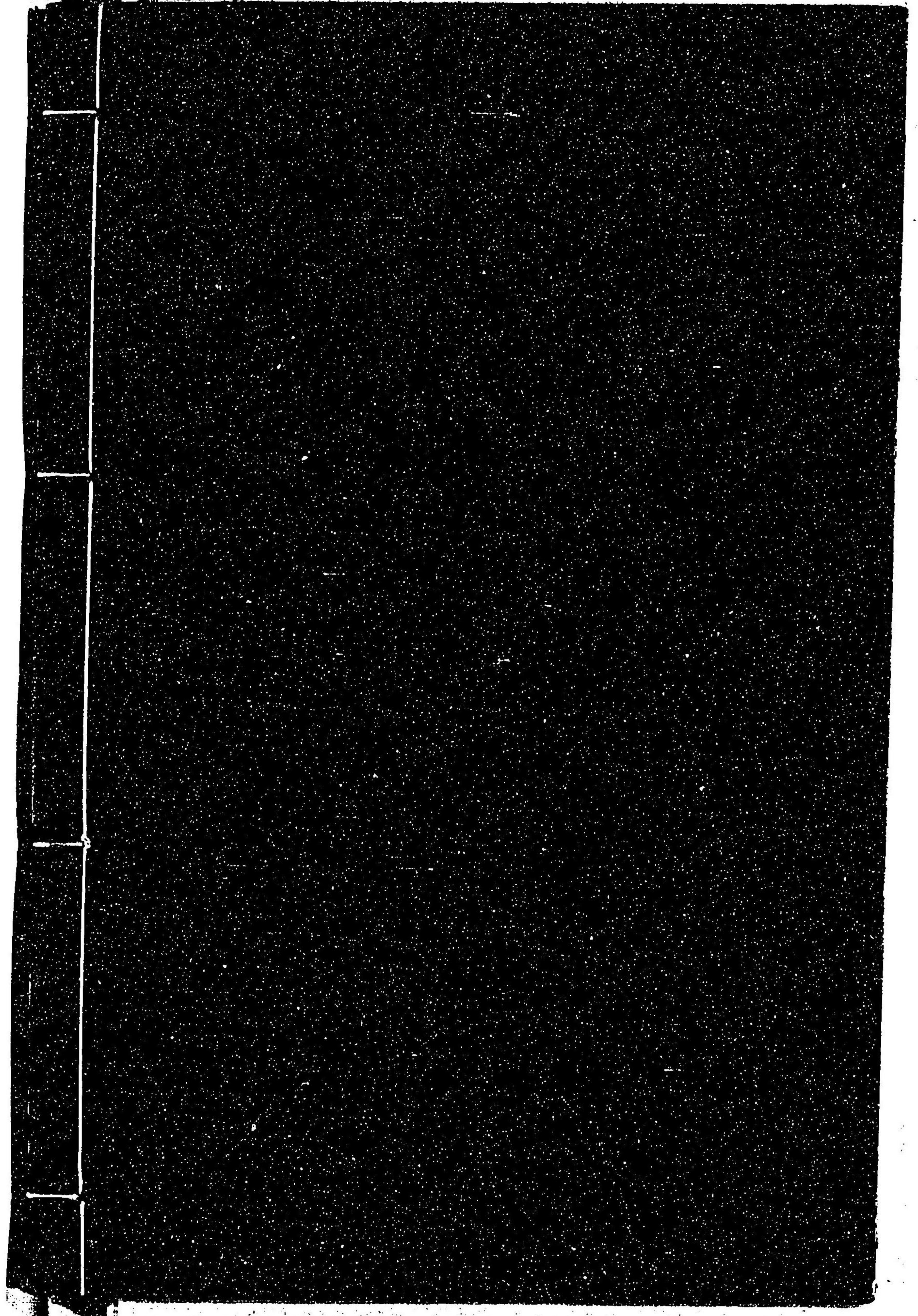
發賣所

攝善會



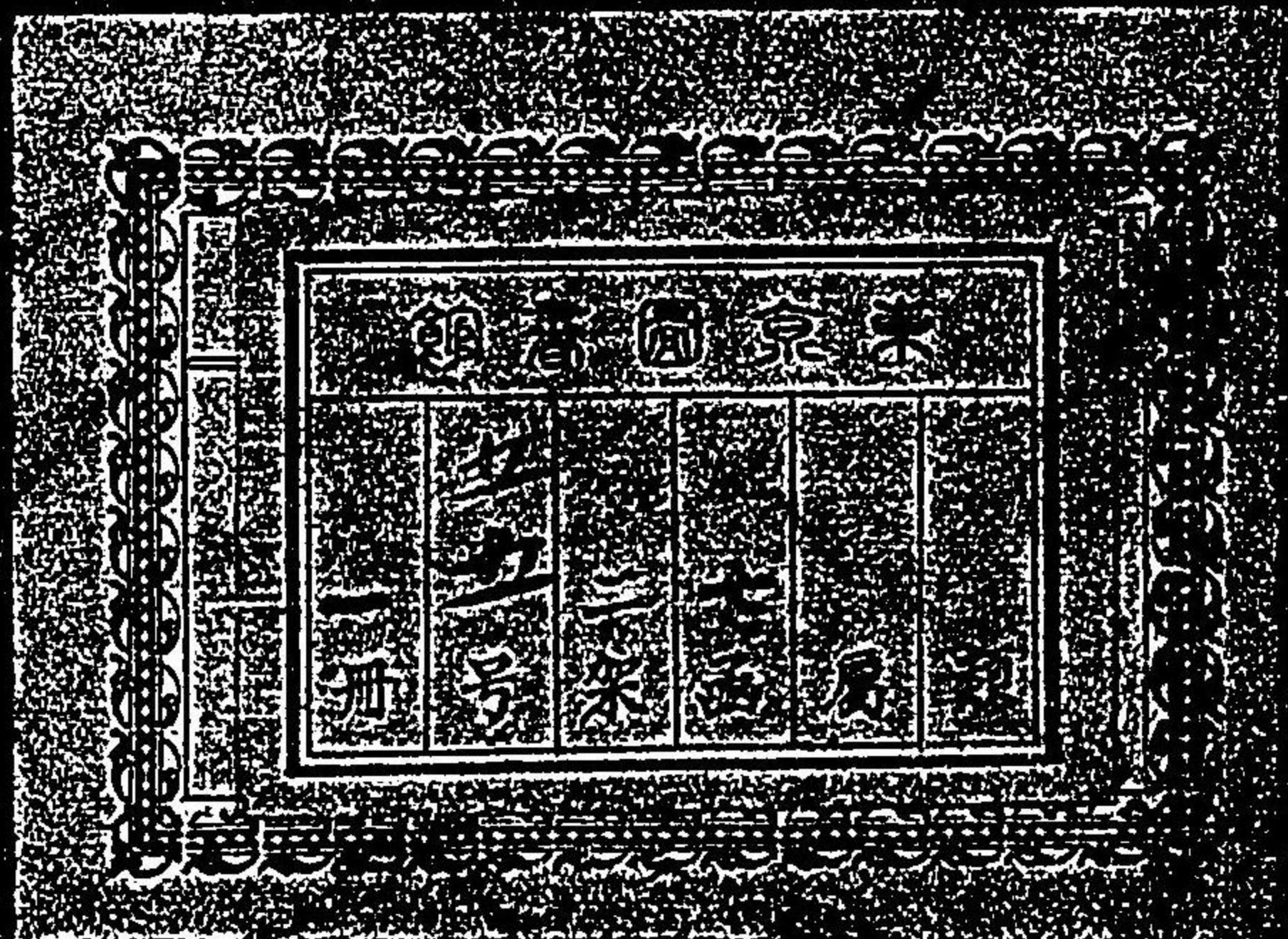
遠江山名郡袋井  
觀福寺中







7  
55



019831-000-5

7-55

寶鏡三味蕉蕓談

林古芳 / 刊

M19. 2

ABG-0660

